

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	メディア	学科
担当科目	「メディア学基礎演習Ⅰ」(担当：柴内康文先生)		

＜春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など＞

私はこの度、教育 GP「相互啓発による創造的学力育成カリキュラム」にチューターとしてかかる貴重な機会をいただいた。私がチューターとして参加している授業は、メディア学科二年次生を対象に開講されている「メディア学基礎演習Ⅰ」(担当：柴内康文先生)で、一般に「ゼミ」と呼ばれている演習形式の授業である。したがって、この授業は一般の講義と授業形態が大きく異なる。そのため、私は、一般の講義に参加したチューターが経験したこととはまた別の体験をしたのではないかと思う。

さて、この演習形式の授業は、いわゆる「読書会」のような流れで進められた。つまり一冊の本を演習の受講者全員で読み、各章の内容の発表をあらかじめ決めた担当者がおこなうというものがある。発表の後にはあらかじめ決めたコメント担当者が、本の内容や発表の内容について意見を示すことになっている。春期中に課題図書として取り上げた本は『マス・オーディエンスの未来像』(W・ラッセル・ニューマン著、三上俊治他訳、学文社、2002)と、『インターネットは民主主義の敵か』(キャス・サンスティーン著、石川幸憲訳、毎日新聞社、2003)である。

柴内先生から私に任された主要な作業は、まだ課題図書が入手できていない受講生のためにコピーを用意するという事務的なものから、内容報告が行われる章を前日までに読んでくるということまで多岐にわたるものだった。また、このような発表形式の授業では発表者が持参しなければならない印刷資料が多くなるため、学部事務室に申請すれば社会学部生なら誰でも無料で利用できる印刷サービスがあることなどを告知するなど、チューターとして受講生を最大限サポートできるように努力した。

しかしながら、私自身、授業内あるいは授業外でどのようなサポートをすればよいのかまだはつきりと分かっていないのが事実である。また、受講生とどれだけ十分なコミュニケーションがとれたのかを考えると少し疑問に感じる。それは受講生からチューターの私に何らかのアドバイスを求めるというようなことがなかったことにも関係しているのかもしれない。

最後に、チュータリング・システムへの若干の疑問点を挙げると、それぞれ異なる学年の演習科目を担当しているチューターが、例えば「ミーティングボード」といったような意見交換するためのツールを、一体どれほど有効に使うことができるのか、という点である。一般の講義では複数のチューターが同一の授業を担当しているため互いの意思交換は欠かせないものである。しかし演習科目担当のチューターはそれぞれ授業に対する関心度や理解力が異なる受講生を相手にしているのであり、異なる学年の演習科目を担当しているチューターとはまた違った状況にあるので、互いの意見交換にはそれほど意味がないのではないのかと思うのである。もちろんまったく意味がないというのではなく、あくまでも一般の講義のチューターと同じようには意見交換のツールを有効に使えないだろうと思うのである。

しかしながら、チューターとして貴重な経験をしたことは間違いない。上に示した懸念も、残る学期の中でまた違ったシステムの運用の仕方が見えてくるかもしれない。今後も気合いを入れてチューター業務に臨みたいと考える。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	メディア	学科
担当科目	メディア学演習 I—6		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

仕事内容

主にパソコン操作の補助や、プリント配布などを行った。

感想

この授業では統計分析の基礎や、統計ソフト SPSS の使い方などを学んだ。私自身、同じ授業を2年前に受けたので、当時の授業の様子と重ね合わせながら受講者の人たちの様子を見ていた。2年前と同様、受講者たちはしっかりと授業を聞き、なんとか分析の手法を身につけようとしていた。半年間で統計分析の基礎を学び、SPSS の使い方を覚えるのは大変だ。単に授業で先生の話聞くだけでは身に付かない。それぞれが、自分の手で分析し覚えていくことが大事だと感じた。授業中、SPSS 操作の時などに見て回ったが、少し操作が遅い人もいた。自宅でもう1度、同じ操作をするなどしてやり方を覚えていく必要があると思った。気づいたことは、分からないことがあればすぐ先生に質問する学生がいたことだ。疑問点をすぐに解決するのは学ぶうえで大切だと思う。

分析方法を一通り学んだ後、知識確認のための小テストがあったが、なぜそこを間違えたのかという確認が大事だろう。まだよく理解できていないならば、もう1度参考書を読んだり、自分の手で分析したりするなどして早めに理解しておかないと、後で大変だと思う。

秋学期からは、自分たちで調査票を作りデータを集めて分析するという作業に入ると聞いている。私自身、後で分析がやりにくいような調査票を作ってしまう苦労した経験があるので、受講者の人たちは春学期で教わった分析手法を活かした調査票を作ることを意識してもらおうといいと思う。

<今後のチューターまたは先生への提案>

提案ではなく反省点になるのだが、パソコン操作などについて聞かれると丁寧に答えてしまう癖があった。だが、授業なので学生に自分で考えてもらわなければならない。簡単に答えて、できるだけ学生に任せてしまうのがいいと思った。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	メディア	学科
担当科目	メディア学基礎演習 I		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

春学期は、2回生の中のひとつのグループに混ざって、実際に雑誌づくりをすすめました。2回生のゼミはメンバーの集まりがとても悪く、人がいなければ雑誌づくりがすすまないのもとても大変でした。仲良しのメンバーで作業するわけではなく、くじで決まったメンバーなので、自分のやりたいことをちゃんと伝えてこないように見受けられる人もいました。ある程度グループの中心人物が決まってしまうと、その人を中心に作業が進んで行ってしまうので、全体の意見を聞けるように気をつけながら作業しなければならないと思いました。

さらに、作業の分担をしっかりとっておかないと、何もしないでいい人もでてくるので、そこは編集長がしっかりと分担させておくべきだと思います。

私のグループはまだ集まりがいい方だったので、作業もほかの班に比べるとスムーズにすすんでいたように思います。休みの日に取材に行くこともありました。

あとは、作業の進行表を編集長しか持っていないで、編集長が来られないときには何をすればいいか皆が把握していないという状況もあったので、全員がコピーしたものをもっておくべきだと思います。このことと同じで、それぞれが連絡先をしらないために連絡が行き届かないので、ゼミの間で連絡網（メーリスでも）があればやりやすいと思います。

<今後のチューターまたは先生への提案>

やはり、出席率が低いと授業をすすめづらいため、出席率の改善に努める必要があると思います。何回以下の出席は単位を落とす…などあらかじめ説明しておく必要を感じました。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	メディア	学科
担当科目	FYS、メディア学基礎演習Ⅰ、メディア学演習Ⅰ		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

最初に佐伯先生より、チューター業務のお話を頂いた時には、具体的な業務の内容やシステムについて、詳しく知ることができず、非常に困惑した。しかし、わたしが以前からチューター業務に興味を持っていたこと、また後輩のサポートを通して最後の学生生活をより有意義に過ごすことができると考えたことから、不安を残しながらも引き受けることにした。

業務の内容としては、わたしが1～3回生時に実際に行った、新聞・雑誌・映像などについての発表とほぼ同じものを、模範として発表すること、また、チューターとして、クラスでの発表者に質疑応答やアドバイスをし、アイデアを提案したり、学生生活をする上での相談に乗ったりするなど、主にクラスの補助を行った。ただ、先生の隣に座って発表を行ったり、発表者の話を聞いたりするだけではなく、授業の前後にゼミ生と雑談をしたり、様々な相談に乗ったりと、積極的にコミュニケーションをとることに努めた。その結果、早い段階でクラスになじむことができ、後輩が気軽に話しかけてくれたり、授業中もゼミ生の発言数が増えたりと、非常に良い雰囲気を作ることができた。わたしや発表者が難しいテーマで発表をしたときは、クラス全体が発言しにくい雰囲気になってしまうこともあったが、そのようなときには、進んで質問を投げかけ、発言のきっかけを与えることに努めた。終始、先生とチューターの間だけで話を盛り上げてしまわないように気をつけ、全員でなくても、一部のゼミ生からいくつか意見を出して貰いやすいようにしていた。

わたしは1～3回生のそれぞれのゼミのクラスを担当しているが、それぞれのクラスに特色があり、チューター業務を行っていても非常に面白い。わたしがそれぞれのクラスで同じテーマ・内容の発表をしても、それぞれに反応や意見も異なり、毎回とても良い刺激を受けている。驚くのは、1回生のゼミ生の問題意識の高さである。毎回2名ずつ発表をして貰っていたが、実に多くの社会問題をそれぞれが取り上げてくれ、またたくさんの意見も飛び交い、非常に感心した。2回生のクラスは人数が少なく、1人あたりの発表数が必然的に多くなるものの、毎回高度で質の高い発表内容であり、ゼミ生のモチベーションの高さに驚いた。3回生のクラスはまだ一度しか担当していないが、授業中の女性陣の積極的な発言に終始驚かされ、またわたしにも気さくに話しかけてくれ、非常に楽しい時間を過ごすことができた。みんな「先輩」と呼んでくれるので、とても嬉しい。

<今後のチューターまたは先生への提案>

わたしは秋学期も引き続き、1～3回生のクラスを担当することになっているため、引継ぎは実質上ないが、できれば今後のチューターにも是非通年で担当して貰いたいと思う。通年で担当することによって、後輩とのコミュニケーションも取りやすくなると考えている。夏休み明けに、早速わたしはいくつか模範発表を行うことになっているので、後輩たちの参考になれるように努めたい。先生へのリクエストとしては、事前に学期中の授業計画をお知らせいただきたいこと、また各学年のクラスで同一のテーマでゼミ生に発表させ、学年間における認識や着眼点の違いなどを比較できれば面白いのではないかということ、の2点である。

2009 年度春学期 チューター業務を振り返って

所 属	社会学部	メディア	学科
担当科目	FYS・メディア学基礎演習（浅野）		

<春学期を振り返ってのまとめ 仕事内容・気づいたこと・感想 など>

チューターを務めたのは、先生からの何気ないお誘いの言葉を頂いたからだ。「1、2回生の面倒を見るチューターを募集しているんだけど、やってみない?」。そう聞いて、すぐに応募しようと決めた。私自身、1～4回生までゼミ形式の授業を受講してきたが、その時に先輩たちに何度も助けられてきたため、次は自分が学んできたことを後輩に返していきたいと考えたためだ。更に、今までのゼミでの縦のつながりはまだまだ弱く、今年度自分が最上回生となる年に、縦の結束を強めたいと思った。

授業が始まった4月、自分の就職活動が忙しくて、なかなかチューター業務に専念できなかった。始めの自己紹介では1回生の反応が薄く、希望して入ったゼミではないため、彼らには意欲がないのだと考えた。ゼミ以外の時間に話すとても元気な様子で、何を考えているのか疑問に思う日が続いた。

自分の就職活動が終わり、チューター業務に専念できるようになってからは、まだまだぎこちない1回生の雰囲気は気になるようになり、まずは互いのことをよく知ることが必要だと考えた。そこで、かねてから計画していた、ゼミ縦合宿を実施することに決め、TAの院生と協力して、6月にゼミ合宿を実施した。その合宿で実施したディスカッションが忘れられない。朝日放送の報道局長を迎え、その講義を聴いた後に、私たちは縦割りのグループでディスカッションをした。テーマは、放送と報道について。私のグループにいた1回生の学生は、始めは上回生の話を静かに聞いていたが、一言「どう思う?」と尋ねると、積極的に議論に参加するようになった。その姿を見て、彼らには意欲がないのではなく、話すきっかけや、話しやすい雰囲気が普段足りないのではないかと感じた。

春学期最後のゼミでは秋学期に何をテーマにするか、話し合った。その際に見た1回生は、初めて出会った時の彼らとはまったく別人だった。始めはおずおずとしていたが、1人が話し出すと、次々に新しい意見が出た。結局共同研究をすることに決まり、そのテーマについても様々な意見が出たが、夏休み中の課題となった。秋学期に、更に成長するだろう彼らと一緒に私自身も成長できたら、と今楽しみな気持ちでいっぱいである。

<今後のチューターまたは先生への提案>

おそらく、4回生でチューターをする人たちは、自らの就職活動、卒業論文から、自らのゼミ共同研究などでいっぱいいっぱいになるだろう。私自身も、春学期は忙しく、両立するのがかなり大変だった。おそらく、秋学期も忙しくなるのだろうと思うと、少し気が焦る。しかし、時間を有効に使えば、チューター業務は重荷ではなくむしろ、自らも成長できる課題となるはずだ。1回生と、授業中だけでなく、心と心の付き合いをできるまでになれば、よりよいチューター業務ができると思う。私自身も、そこを目指して、秋学期も励むつもりである。